錦城高校新聞

題字　井口　文章

文Ｐ参加特別号

印刷・発行

錦城高等学校新聞委員会
編集室 2016

みんなでつくる
錦城高校新聞

文化プログラムプレスセンター取材会に参加しました。本号は文P出展特別号です。オリンピックに向けた伝統と最新技術の融合をお伝えします。

東京2020を盛り上げる「文化のちから」

東京五輪文化プログラム第一回取材会開催

11月27日（日）東京有明のパナソニックセンター東京で、中高大・専門学校生らがボランティア・ジャーナリストとして参加する「文化プログラムプレスセンター」第1回取材会が開かれた。これは2020年東京オリンピック・パラリンピックに向け、中高生らが大会機運を高めるための文化プログラムを取材し、ジャーナリスト体験をするというものだ。今回、共同通信社から招待を受け、編集部有志8名が取材会に参加した。

取材会では、高校生記者が展示内容や企画秘話などを来場者や担当者に続々と取材した。写真は「文化の面でもオリンピック盛り上げたい」と語る企画担当の那須さん（右）

中高生が取材会に参加

私たちが参加した文化プログラムとは、カルチュアル・オリンピアード（注1）にもとづいて、全国で企画されている様々なイベントの総称だ。今回の取材先は、東京2020公認プログラム・特別企画展「文化のちから」。パナソニックセンター東京で12月4日まで開催された。パナソニックは、ワールドワイド・オリンピックパートナー（注2）として活動している。今回は都内や福島県から集まった中高生22人が取材体験をした。

まず初めに、共同通信社人材育成本部事務局長の緒方伸一さんから「あなたのnew見つけよう」というテーマで取材講義を受けた。長年の記者経験から、取材させていただくという謙虚さ、感動などを探し出す想像力、伝えたいという切実さ、の3つが揃ったときに表現は訴える力を持つと話してくれた。記者の最大の魅力は「出会い」で、出会い自体が仕事であると語る緒方さんのレクチャーの後、取材に向かった。

注1：五輪に向けた文化振興活動。開催国では準備の4年間、様々な文化活動を推進することがIOCにより義務づけられている。

注2：一業種一社のみ認められるIOCの最高位五輪スポンサー。パナソニックは最新技術の映像・音響機器で1988年大会から参加する。

会場の説明パネルを見て熱心にメモを取る取材会参加記者

日本の魅力伝える最新技術

「文化のちから」は、伝統的な日本の文化芸術の魅力を、最新のデジタル技術によって発信する催しだ。6つのテーマ「日本の紋」「日本の色」「楽しむ」「装う」「しつらう」「味わう」を中心に、日本の伝統行事、旬の食材を生かす和食文化などが学べる。

全部で11のパナソニック最新デジタル技術が使用されており、五感で日本の伝統文化をバーチャル体感することができる。マイクに喋りかけたりパネルを動かしたりするだけで、色鮮やかな動画が投影されて、会場の小さな子どもたちも楽しんでいた。

「私だけの発見」探そう、とレクチャーする共同通信緒方さん

親子で楽しめる体験型展示

旬の食材を使った主食や副菜の組み合わせをパズルで学べる「味わう」の展示では、家族で遊びに来た鈴木那都ちゃんが夢中で両手を伸ばし、季節の食材合わせパズルに挑戦していた。正解すると色鮮やかな演出がディスプレイに表示され、那都ちゃんは嬉しそうにはにかんでいた。よくセンターには来るというお父さんの鈴木俊雄さんは「展示には人を惹きつける魅力がある」と目を細めていた。

旬の食材を合わるパズルを通して日本の食文化を学ぶ鈴木さん親子

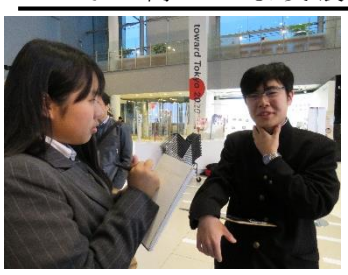
取材会終了後も盛り上がる

取材体験の後、もう一度皆で集まり、互いに感想を発表した。「知らなかった日本の伝統文化や最新の科学技術を知ることが出来た」「新聞や写真を通して自分が体感したことを伝えていきたいです」「子供連れのお客さんが多くて、年齢を問わず楽しめる企画展でした」などの声が上がった。

共同通信の緒方さんは記事の書き方について「まずタイトルを決めて、これだけ伝えたいということに絞って、何を書きたいか明確にすることが大切です」と参加者にアドバイスをくれた。

取材会終了後も参加者はそれぞれ取材をし合ったり、共同通信から逆取材を受けていた。参加者の1人、都立富士高校二年生の大野祐介くんは、パナソニックの「人を喜ばせたい」という「おもてなし」の心を感じたという。今回の取材会について「取材で普段出会うことが出来ない人と触れ合うが出来たので、良かったです」と笑顔で振り返ってくれた。

今回の取材会の様子は、後日共同通信から記事と動画で配信された。文化プログラムのイベントは今後も数多く予定されているそうだ。また機会があったら、ぜひ取材会に参加してみたいと思った一日であった。



おもてなしの心感じたと参加者の一人

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

取材担当：錦城高校2年藤原・1年中村・森田・名古屋・西海・三浦・横山・田矢

共同通信記者に逆取材成功

取材会の取材をしていた共同通信の工藤恵記者は、「中高生もオリンピックに興味をもつ良い機会になると思います」と取材会を振り返る。

せっかくのなので話を伺うと「自分が分かっていないことは記事にできないので、その都度調べながら書いています」と取材のコツを教えてくれた。元々はアナウンサー志望だったという工藤記者は、「まず、世の中には様々な職業があるということを知ることです。視野を狭くせず進んでいってください」と笑顔で進路選択のアドバイスをしてくれた。

会場で現役記者にも取材を試みる

伝統と最新の共演会　外会場も取材してみた！

伝統工芸の良さを生かしたいと語る担当の中川さん

特別展示の外会場でも、日本の伝統と技術の最先端が展示されていた。パナソニックアプライアンス社デザインセンターの中川仁さんが担当した「織り響」「響筒」は、それぞれ西陣織、金属製茶筒と音響スピーカーのコラボ製品だ。「織り響」は西陣織で使われている金糸と銀糸が通電してスイッチが入る。「響筒」は密封性の高さを生かして、微妙な蓋の開閉で音量や余韻を楽しめる。それぞれ、日本の伝統工芸の特色と最新技術を上手に組み合わせた、新しいジャンルの作品だ。担当の中川さんは「最新が出ると価値が下がるような家電ではなく、長く使い可愛がってもらえる家電があったらいいなと思います」と素材にこだわったポイントを語る。この他に月灯なども展示され、伝統工芸を身近に感じることができた。

特別企画展担当者に聞く
東京2020を支える熱い想い

「文化のちから」企画担当の一人、パナソニックの那須瑞紀さんに話を聞いた。那須さんは1年ほど前からこの文化プロジェクトに携わり、企画展の準備をしてきた。文化と言っても幅が広いため、何を取り上げるかを決めるのが一苦労だったと話す。最終的に「日本の衣食住を楽しむ」という切り口での開催となり、例えば「装う」の展示では、ファッションデザイナーの矢内原充志さんに監修を依頼した。那須さんは「この企画展が実現できたのは多くの方の協力があったおかげです」と振り返る。

伝統ある文化も積極的に現代の文化と融合させたいと語る那須さん

文化を楽しむきっかけを

「そもそもなぜパナソニックがこうした文化を発信する活動をしているのかというと、2020東京五輪のカルチュアル・オリンピアードの一環としてパナソニックの最新技術を生かしていくためなのです」と那須さん。同社は、リオ大会の開会式では100台以上のプロジェクターを納入し、盛り上げに寄与した。今回の企画展でも、随所に最新のデジタル技術が活用されていた。

伝統ある文化の最も大切な「軸」さえ残っていれば、むしろ積極的に現代の文化と融合させていきたいと話す那須さん。取材の最後に「未来を担う若い人たちにも日本文化とは決して古くさいものではなく、少しでも楽しんで、良いものだと思ってほしいです。そのためのきっかけを私たちは提供していきます」と今回の企画の意図を力強く語った。

東京オリンピックに向け、仕事に取り組む那須さんの話を聞き、オリンピックはアスリートだけでなく、那須さんのような人達も奮闘することで作られると知ることができた取材会だった。

「来場者に合わせた係員の案内を工夫した」と企画担当の中川さん

徹底体験・特別企画展「文化のちから」のハイテク技術
最新技術で伝えたい日本の伝統文化を体感してみた

プロジェクターで壁一面に映し出された歌舞伎の映像を楽しむ

日本の最新技術で興味深まる

この企画展には、最新デジタル技術がたくさん仕掛けられていた。いくつかの展示を紹介してみよう。

会場に入るとすぐに、センサーが人を感知して足元に池が投影された。これは来場者を自然に会場内に誘導する効果があるそうだ。会場内は、「楽しむ」の展示では歌舞伎の海外公演の動画をDLPプロジェクター技術で投影し、骨伝導ヘッドホンで解説を楽しむことができる。「日本の紋」の展示では、スペースプレーヤーという機械で目の前で鮮やかに模様が描かれた。

「しつらう」の展示を興味深げに見つめる来場者たち

会場内で展示説明を担当する浅香ななみさんによると、この企画展では光ＩＤという技術に注目だという。これは、各展示にある説明パネルに手持ちのスマートフォンをかざすと、より詳しい情報を見ることができるという技術で、パネルに当たっている光を点滅させることで情報を発生させ、スマートフォンが読み取る仕組みだ。浅香さんは、詳細に書かれた説明パネルが展示の見やすさを邪魔してしまう問題を、この技術は解決できると語る。

老若男女楽しめる最先端技術

「装う」の展示を前に係りの方に説明を聞く高校生記者

各展示では子どもがゲーム感覚で伝統文化に触れることのできる技術がいろいろ使われており、浅香さんも来場者の「そんな技術が発達しているんだ！知らなかった！」という感想をよく耳にするそうだ。浅香さんは「このような技術が早く世に出回ってほしいです」と各展示を見渡して笑顔で話してくれた。来客者案内を担当する井田静香さんは「若い人からお年寄りまで誰が見ても飽きず、楽しめる展示なので、少しでも日本の文化を見てほしいなと思います」と笑う。

記者も実際に体験し、2020年東京オリンピックに向け、多くの人に幅広く日本の伝統文化や科学技術を知ってもらえる企画展だと感じることができた。

むらさき草

今回、文化プログラム第一回取材会に参加し、伝統文化を新たな面から知ることが出来た▼最先端技術と伝統の融合に、古き良きものを新たな技術でより効果的に表現できると知り、感動した▼取材を通して、オリンピックに向けて日本の良さを伝えていこうと活動している人が、開催の4年前から様々な方面で関わっているのだと実感する▼今回の企画は日本文化というテーマで行われたが、文化プログラムは今後もサブカルチャーや地球環境、少子高齢化など多岐にわたるテーマで開催されていく▼他のイベントにも参加して、4年後の東京オリンピックへ向けて文化やスポーツの面白さを見つけていきたいと感じた▼皆も、オリンピック開催国だからこそ得られるこの機会を活かして、文化プログラムなどのイベントに参加してみてはどうだろう。